路上生活者の個人史

第８回

竹中尚文

長野　昭彦　氏(仮名)

1960 年 11 月生まれ。

出生は高知県です。5 人兄弟と両親の 7 人家族ですが、兄弟は 5 人兄弟として育ちました。私と姉の 2 人はお母さんが違います。お母さんが違うというのは、成人する頃まで知りませんでしたし、どんな事情があったのかも知りません。私たちは、特にお母さんが違うという意識をするようなことはなく育ちました。

中学校を卒業して職業訓練校に行きました。経済的な理由で高校に行かなかった訳ではありません。お父さんはしっかり働いていたので、経済的に苦しいということはありませんでした。職業訓練校では、配管工の勉強をしたのですが、途中で辞めてしまいました。そして、地元で土木や建築の仕事をしていました。二十歳の頃に闇手配師によって中京圏で働くようになりました。給料はありませんでした。時々、5 千円とか 1 万円程度を貰うだけで、残りは「預かっておいてやる」といわれていました。給料を貰えないので、逃げ出すと捕まって殴られることが続きました。このままではダメだと思って、少しずつお金を貯めました。二〇代半ばの頃、故郷に逃げて帰りました。

しばらく、故郷にいてから、関西にやって来ました。阪神や大阪で土木や建設の仕事をしました。前と違

って給料は貰えました。といっても、いつも全部貰えた訳ではありません。何かおかしいと思うこともありました。変だというと喧嘩とかになって、給料を貰わないままになったこともありました。給料を貰わないまま仕事を辞めてしまうこともありました。そんなに給料は多くなかったですよ、バブルの時でも月に20万円ほどでしたから。

給料を貰って余裕ができると、ボートや競輪、競馬、パチンコなどをしました。お金がなくなると、また働くという生活でした。結婚とかは考えたこともありません。そんな出会いもありませんでしたし、こんな生活を55歳くらいまで続けました。

それからは、今の生活になりました。友だちの住まいや知り合いの所に泊まらしてもらっています。いろんな人の世話になっていますし、こんな炊き出しなんかもたくさんあるのでなんとか暮らしています。

将来の夢や希望ですか？　そんなものはありません。ただ、死んだときに何もなく処理されるのはいやだと思う。お経のひとつもあげてほしいです。

今回、聞き取りに応じてくれたのは長野昭彦氏(仮名)である。長野氏が社会に出てから、関わってきた人の多くが彼を利用してきたように思った。ほんの少し彼のために知恵をくれたり、ほんの少し骨を折ってくれたりする人がいたら、長野氏の人生は違ったかも知れない。また一方で、仕事をリタイヤした現況に手を貸してくれる仲間の存在は、彼の人柄に起因しているようにも思う。